

まとめ

平田 泰雅（森林総合研究所 REDD 研究開発センター長）

今回われわれは「REDD プラスはどこまで来たか？」というタイトルでセミナーを開催した。REDD+と言えば比較的新しい感じがするが、途上国の森林減少・劣化を考えると、実は1992年の「環境と開発に関する国連会議（地球サミット）」がブラジルで行われた際、途上国での森林減少・劣化が気候変動に大きな影響を及ぼすだろうということは既に世界的に認識されていた。しかし、その後、1996年の京都議定書が先進国を中心とした枠組みになってしまったために、1992年の地球サミットで認識されていた途上国における森林減少・劣化の問題が、ややもすると置き去りになってしまったという経緯があった。京都議定書以降の枠組みを話し合う中で、途上国からの排出も削減しようと提案されてきたのがこのREDD+である。REDD+が2005年のCOP11で提案され、さらに2007年、インドネシアのバリ島で開催されたCOP13で正式な議題として取り上げられるようになり、そこからこのREDD+の議論が深まってきた。従って、今回のこのセミナーまでの間に約10年の期間がたっている。また、われわれ森林総合研究所でも、これを非常に大きな課題と考え、2010年7月にREDD研究開発センターを立ち上げた。間もなく当研究センターも10年を迎える。そういうこともあり、一つのマイルストーンとして、途上国における森林減少・劣化の問題についてわれわれの取り組みを振り返り、さらにこの後、2020年から始まるパリ協定の中でどのような活動をしていけばいいのかという契機になればと思い、今回このような会議を開催した。パリ協定が決まった後も、実は途上国で森林減少・劣化が必ずしも止まっておらず、むしろ加速している国もまだまだたくさんある。そういう国にわれわれは何ができるのか、ここの時点で振り返るということで、3つのセッションを設定した。

最初に基調講演の中で、Seymourさんには現在どこまで来ているのかをお話しいただいた。実はSeymourさんには、10年前にわれわれが一連のセミナーを開始したとき、最初に基調講演をしていただき、ちょうど10年がたち、一体REDD+がどういう枠組みで仕上がってきているのか、最新の情報を交えて整理していただいた。また、COP13がインドネシアのバリで開催され、バリロードマップで森林が取り上げられ、もちろん簡単な道ではなかったが、この10年間に着実に歩みを進めてこられた。Ruandha総局長には、その歩みと現在の状況についてご報告いただいた。セッション1では、技術的な面、特にリモートセンシング、モニタリング、セーフガードの問題が現在どこまで達成されているのかについて整理した。セッション2では、REDD+を実際に進めていくための施策と資金を考えるために、現在までの仕組みについて整理した。最後のパネルディスカッションでは、われわれが現在までの成果を踏まえて今後どういう方向に進んでいくのか、皆さんから意見を頂戴した。

2015年のパリ協定と年を同じくして、国連ではSDGsを決定し、そのSDGs17の目標の下に169のターゲットを設定した。このターゲットの中の15.2には、目標として2020年の来年までに「森林減少を阻止」という文言が入っている。これは非常に難しい問題で、現実問題としてその達成が可能かという点で難しいが、今日のセミナーがそれに向けてわれわれがどう進んでいかなければいけないのかを考える契機になればと思う。また、SDGsの15.bのターゲットでは、途上国に対するインセンティブのことも記載されていて、このREDD+はSDGsの中で、貧困

Closing Session

対策や気候変動のゴール 13 のターゲットであると同時に、具体的なターゲットとして 15.b にも記載されていることになる。

今回のセミナーを、この後われわれが進めていく研究を考える契機にさせていただくとともに、REDD+に参画を考えている皆さま、この交渉等に加わっている皆さまにも、本日のセミナーが有意義なものになっていればと主催者として考えている。今日は長時間の講演に多数お集まりいただき、登壇者の方々にいま一度拍手でお礼を差し上げたい。これをもって本日のまとめとし、本セミナーを終了する。